

展示物のスキャン方法について指導する園原さん(右)



園原さんらは、博物館のスタッフたちに沖繩の「今」を見てもらうことにした。戦争を伝えることの意味を、あらためて考えてもらうためだ。

そこで園原さんらは、博物館のスタッフたちに沖繩の「今」を見てもらうことにした。戦争を伝えることの意味を、あらためて考えてもらうためだ。

館者一人一人が学びを得られる場にするため、博物館では定期的に展示を入れ替えています。博物館に完成形はありませんから。建物の造りや展示方法など、試行錯誤を続けてきた。

その経験を、同じように戦争に翻弄された歴史を持つ国に伝えたい。いつしかそんな思いがわき起こり、縁あってつながったのがカンボジア。ポル・ポト政権時代に激しい内戦を経験し、わずか4年間で国民の5分の1が命を奪われたといわれる国だ。

それから30年以上の月日が流れ、首都プノンペンには、アジアの

けん騒ぎという言葉がびつたりなほどに発展した。しかし人々はいまだ、自国の歴史を背負いながら懸命に生きている。その象徴の一つが、街の中心部にある「トゥールスレン虐殺博物館」。ポル・ポト政権時代に政治犯の収容所として使われ、2万人を超える人々が激しい拷問を受けた場所だ。

平和の光へと導くために

当時の独房なども見学できるのが、トゥールスレン虐殺博物館の売りの一つ。しかし展示資料には十分な説明が加えられず、写真も色あせており、スペースも狭くて閉塞感があつた。「悲惨さや残酷さをおおるような展示で終わってしまったって、もったいない。歴史的背景をしっかりと伝え、最後に光が見える出口をつくってあげないと、来館者には苦しみだけが残ってしまうのです」と園原さんは指摘する。

「私は、これをやった方がいい」とは言いません。沖繩の博物館づくりの姿勢を見てもらい、彼ら自身が感じて挑戦することを応援したいのです」と園原さんは話す。

まず案内したのが糸満市の「平和の礎」。沖繩戦で犠牲になった全ての人の名が刻まれている石碑だ。「自国の犠牲者だけでなく、敵国の戦闘員の名前も刻まれている。沖繩の人たちの両者を悼む心に驚きました」とケ・ソボンナカ館長(当時)。その他にも、住民が避難した洞窟「ガマ」や慰霊塔などを視察して回った。そんな1カ月の研修の実践の場として、沖縄県立博物館・美術館でカンボジアの歴史を伝える展示を実施。沖縄の人たちがカンボジアを知り、自身の歴史を振り返るきっかけにもなったと好評だった。

そして帰国後、スタッフたちは博物館の在り方を見直し始めた。真っ先に取り組んだのが、沖繩で学んだ資料の保存方法を生かした4000を超える政治犯の調査の展示。ユネスコの世界記憶遺産にも登録されているほど貴重なものだ。外国人観光客にも理解できるように英語にも翻訳し、顔写真と履歴書と合わせて一部一般公開にこぎつけた。また、人に伝えるためにはまず自分たちが知らなければと、若いスタッフが家族に当時の話を聞いたりもした。

現在は、内戦時に最も被害の大きかった北西部のバタンバン州での移動博物館を企画中。一人でも多くの人たちに歴史の重みと未来への希望を伝えたいという、現地のスタッフの思いとアイデアから生まれたものだ。「5年前に働き始めるまで、博物館の存在すら知りませんでした。カンボジアの人々が自国の歴史を知り、世界と共有できる場となるように努力したい」と移動博物館を担当するハング・ニサイさんは意気込む。プノンペン市内にあるカンボジア国立博物館も巻き込み、来館者が展示を見ながら学べるワークシートの制作などにも取り組んでいる。

戦争の歴史を博物館という空間で紡ぎながら、沖繩とカンボジアは共に、世界に平和を発信していく。



沖縄県立埋蔵文化財センターでは、考古遺物の保存修理について学んだ

来館者が館内を回りながら学びを深められるワークシートをカンボジア国立博物館と共同制作



沖繩で研修を行う時は必ず訪問するという「平和の礎」。沖繩戦で命を落とした人々の名が刻銘されている

博物館で歴史を紡ぐ

アメリカによる統治を経て、1972年に本土復帰を果たした沖縄県。その歴史を忘れまいと、後世に語り継ぐ取り組みが続いている。そのノウハウが渡っているのが、内戦を経験したカンボジアだ。



沖縄県



園原さんらのアドバイスを受けて、トゥールスレンに収容された人の資料が見やすく展示されるようになった

戦争の歴史を後世に語り継ぐ

すっかりしない天気が続いたこの夏。しかし、8月最終週の沖繩は青空が広がり、夏休みの最後を楽しむ家族でにぎわっていた。

沖繩といえば日本を代表するリゾート。しかしこの地が背負ってきた歴史は、そのイメージとはかけ離れている。太平洋戦争時、住民を巻き込んだ国内で唯一の地上戦が展開され、多くの犠牲者が出た。戦後もアメリカ統治の時代が続き、人々は心身ともに苦難を強いられた。

戦争による悲劇を二度と繰り返さないよう、次の世代にも伝えて

いきたい。沖繩では、そんな思いを誰かが抱いている。

そのための拠点の一つが「沖縄県立博物館・美術館」だ。那覇空港からモノレールで20分、白を基調としたモダンな概観だが、その歴史は1946年に開館した「沖縄県立平和祈念博物館」とともに、沖繩の歴史をつぶさに感じることができる空間になっている。

「琉球王国からの歩み、沖縄戦の教訓を後世に受け継ぐために、この2つの博物館は重要な役割を果たしています」。そう話すのは、70年代から両博物館の運営に携わってきた学芸員の園原謙さん。「来